

日本語日常会話における「-たい」の使用による相互行為実践

－「-たい」で言い切る形式が使用される事例－

劉楚帆（筑波大学大学院生）

1. はじめに

「願望」や「希望」を表す表現である「動詞連用形+たい」（以下「-たい」）の使用に関して、従来の研究では「許可を求める」「間接的な依頼を行う」「意思を表す」「行動を促す」という談話的な機能を持つ表現として分析されてきた（岡野，1991；孫，2014）。しかし、これらの研究は、ほとんどが文学作品やシナリオから抽出された単独の文を対象に分析を行ったものであり、自然に起こる会話における「-たい」の事例を対象にした分析は、管見の限りわずかである。筆者が実際にデータを収集した結果、日常会話において「-たい」という表現は常に単独で使用されるのではなく、終助詞「ね」「よね」とともに使用される場合や疑問文で使用される場合など、多様な事例が観察された。使用される環境が異なることから、すべてを単独で使用される「-たい」の機能に帰納することは妥当ではないと考えられる。したがって、本研究では、発話の述語に「-たい」が含まれる事例を対象に会話分析の手法を用い、日常会話における「-たい」の使用およびその使用環境を明らかにすることを目的とする。

前述したように、データを収集して観察した結果、日常会話における「-たい」は多様な使用がされている。その使用環境もそれぞれ異なっている。また、誰の希望として産出されるのかというのも分析に影響を及ぼすと考えられるため（疑問文で産出される場合、話者自身の希望ではなく、受け手の希望を確認することになる）、とりわけ話者自身の希望として産出される発話の事例を押さえておきたいと思う。よって、本稿では、「-たい」が単独で使用される事例を取り上げ、これまで分析されてこなかった自然会話における「-たい」の使用の特徴を検討する。本稿で使用されるデータは、『日本語日常会話コーパス』完成版（小磯ほか，2022）である。

2. 評価対象を明確化する手段として利用される「-たい」

断片1は高校生の生徒Sが勉強が終えた後、塾を経営している教師Tとその部下Eと、塾で雑談をしている場面である。断片1の直前に、昔塾にいた「イケメン」（今は大学生）に彼女がいるかどうかということが話題になっている。それについてTとEは確かな情報を持っておらず、01行目の直前にEは「まあモチんだろうな」と応答する。

断片1 「イケメン」 [T018_001] [11:23-12:00]

- 01 S: 教えに来ない?
02 (1.4)
03 E: 忙しいと思う[よ
04 T: [忙しいの=((お菓子を食べながら発話する))
05 E: =うん(0.4)ほかのこともやってっからさいろいろとね
(('うん'の後にSは眉毛を上げる))
06 (0.7)
07 E: うん
08 S: °いいね°

09 E: そうそう
 10 (1.3)
 11 E: 忙しいよ(.)うん
 12 (0.3)
 13 S: う:ん
 14 E: いろんな活動してっからね
 15 (0.6)
 16 S: [偉
 17 E: [よく聞いたら
 18 S: え[なんでそんな頑張ってるの?
 19 E: [うん
 20 (0.6)
 21 E: うん
 22 S: すごい未来のために頑張ってた
 23 E: あ:
 24 (0.7)
 25 S: すご:い
 26 E: うん
 27 →s: すごい(.)そうゆう人の話し聞きたいでも
 28 E: あ:

この断片では、27行目Sの発話「そうゆう人の話し聞きたい」は分析対象となる。まず、27行目にたどり着くまで、相互行為上何が起こっているのかを押さえておこう。断片の前のやり取りによると、Sは中学生の時にその「イケメン」と面識があったのかもしれないが、相手の詳しい情報を知らないし、今も塾で会ったことがない。それらを踏まえて01行目の質問「教えにこない?」が産出される。その質問に対してEはより詳しい情報を持っている人としていろんな組み立てで回答を試みている(03, 05, 14, 17行目)。その都度、Sは反応を産出しているが、反応を与える対象は違うという点に注意されたい。

「イケメン」という人物は今塾に来ていない理由について、まず03行目でEは「忙しいと思うよ」と自分の主観的な判断を述べる。それに対してSは応答せずにただ眉毛を上げて反応を示す。続いて05行目でEは「ほかのこともやってっからさいろいろとね」というより客観的な理由を挙げ、「忙しい」と判断した根拠を提示する。0.7秒の沈黙と07行目Eの「うん」を挟んで産出されることから、Sは反応を引き延ばしていると聞こえるが、08行目で「° いいね。」とポジティブな評価を与えている。それから、14行目でEはさらに05行目で挙げた客観的な理由を具体化して「いろんな活動してっからね」と述べる。すると、Sは16行目で「偉」とポジティブな評価を述べる。ここまでSが産出したポジティブな評価は言うまでもなく、直前のEが提供した「イケメン」に関する情報に基づいて「イケメン」本人のことに對して産出されたものである。

14行目以降は、Eはそれ以上情報を提供していないが、Sはここまで受けた「イケメン」の情報に関してどのように認識しているのかを18行目で打ち明け始める。「イケメン」という人物は、「すごい未来のために頑張っている人」とSは認識している(18, 22行目)。その後、25行目でSは音を引き延ばしてやや大きな声で「すご:い」と前の評価と違う仕方でもって産出する。この評価は産出される仕方が前の評価と違うが、「すごい未来のために頑張ってた」というSの認識の後に産出されたことで、「イケメン」本人への評価として聞ける可能性も残っているため、Eは26行目で「うん」と発して同意を示す。そしてようやく対象となる27行目にたどり着くが、Sはもう一度「すごい」とポジティブな評価を産出し、「そうゆう人の話し聞きたい」という自分の希望を述べる部分を付け足すことによって評価対象を明確化する。

なぜ27行目で「すごい」という評価の対象を明確化するという作業が行わなければならないのか。それは、

相互行為を進める中で S が評価する対象は、先行文脈で「話題」となっている対象とは異なるものになったからである。27 行目が産出される前に、先行発話の中で S は「イケメン」という人物が「未来のために頑張っている人」として認識していることを示している。27 行目の「そういう人」は、先行文脈ですでに言及されていることに関連付けられるものとして聞くように用いられていることから、「未来のために頑張っている人」というグループに属する人たちのことを指していると言えよう。つまり、27 行目の「すごい」という評価は、これまで話題となっている「イケメン」という個人に対するものではないということが明らかにされている。さらに、28 行目 E の「あ:」という反応も、「すごい」という評価は先行文脈で話題となっている「イケメン」と異なる対象に対して行われるものだと認識していることを示している。

断片 1 のように、先行文脈に語られている「話題」と異なるものに対して評価を行う際に、評価対象の変更を明示的に示すために、その評価に関連する対象を明確化する作業を行う手段として、話者自身の希望として産出される発話（「-たい」）が用いられているのである。

3. 妥当性の問題に対処する手段として利用される「-たい」

断片 2 は、家族四人（母親 M、父親 F、長男 S、長女 D）で夕食を食べながら雑談している場面からの抜粋である。断片の直前では、犬（めるちゃん）が S に 2 階から連れられてきた後にずっとテーブルの下で嗅ぎ回っている。それを見て母親 M は犬に餌を「入れてあげて:」と S に指示を出す。S はドッグフードが臭いから「食事中に見たいもんじゃない」ということを述べ、犬の餌が食事に影響を与えるものとして認識していることを示して拒否する。そして、M はまた F にも同じような指示を出す。F も拒否する。その後、M は 01 行目のように、誰も犬に餌を入れてあげたくないことに対して不満を述べる。

断片 2 「ドッグフード」[T024_007][11:06-11:22]

- 01 M: (h) なんでやの (h) かわいそうやんな: めるちゃん
02 S: だって臭くて食欲[なくなっちゃうもん]
03 M: [怒ってはん] ねんやもうええやん: いっぱい食べとるがね
((「もうええやん」の産出とともに S の前にある食器を指差す))
04 →S: ケーキ食べたい:
05 M: ん食べやほんならここにあるがな

この断片では、04 行目 S が産出する発話「ケーキ食べたい:」は分析対象となる。01 行目で M の不満を述べる発話が産出される時点は、S と F がそれぞれ一回餌を入れることを拒否した直後である。つまり、誰が餌を入れるのがまだ決まっていないところである。そのため、「なんでやの」という拒否の理由を尋ねる部分は S に向けて産出されるものではないが、S は 02 行目で自ら拒否の理由を述べる。「だって」によって発話を産出し、餌を入れてあげると「食欲」に影響を及ぼすことになると主張し、S は拒否の立場の正当性を示す。しかし、「食欲」を損なうことを理由として餌を入れることを拒否するという部分に対して、M は 03 行目で「や」を発して何らかの抵抗を示しつつ、S の前にある食器の方向を指さしながら「もうええやん」と反論を開始する。反論する理由は、S がすでに「いっぱい食べとる」ことである。つまり、十分に食事を取っている S はこの時点で、「食欲」を損なう可能性があることを拒否の理由として述べる妥当性が問われていると言えよう。

そこで、04 行目の発話が産出される。S は 04 行目で「ケーキを食べる」ことを希望することを端的に述べる。これまでのやり取りを踏まえると、ここでは、「食欲」の問題が餌を入れることにどのように関係しているかは、拒否の理由の妥当性に大きく関わっていることがわかる。したがって、直前の「食欲」に関する拒否の理由の妥当性が問われることに対処するために、04 行目の発話は S にとって「食欲」を損なわないことが関係していることに根拠づけられるものとして産出されると言える。

断片 2 のように、先行発話が産出される時点である部分に妥当性が問われる際に、問われる妥当性を裏付ける根拠を提示するために、話者自身の希望として産出される発話（「-たい」）が対処する手段として用いられて

いるのである。

4. おわりに

本稿では、従来の研究において示されていなかった日常会話における「-たい」の使用の特徴について検討を試みた。分析した結果、本稿で取り上げた事例では、話者自身の希望として産出される発話で「-たい」の使用によって、相互行為の進行上に生じる問題に対処することが可能になるということが明らかになった。

前述したように、日常会話における「-たい」の使用は常に言い切る形式で現れるのではなく、終助詞や疑問文と共起するものも筆者が収集した事例の中で多く見られる。このような形式で産出される発話における「-たい」の使用はまた異なる特徴を持つ可能性がある。今回取り上げた事例以外のものの特徴を明らかにするために、さらなる研究が必要である。それぞれ異なる相互行為の環境での「-たい」の使用を分析することで、日常会話における「-たい」の相互行為上の働きについて包括的な記述を与えることを今後の課題とする。

参考文献

- 岡野喜美子(1991). 許可を求める—～タインデスケドをめぐる— 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, 3, 1-22.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022). 日本語日常会話コーパスの設計と特徴 言語処理学会第 28 回年次大会発表論文集, 2008-2012.
- 孫樹橋(2014). 意志表現をめぐる日中対照研究 神戸市外国語大学文化交流専攻言語コース博士論文.